

〔科目名〕 ACB 演習	〔単位数〕 4単位	〔科目区分〕 卒業研究科目				
〔担当者〕 江連 敏和 (Toshikazu EZURE)		〔授業の方法〕 演習				
〔演習テーマ〕 この演習では、青森市・青森県はじめ日本各地の地域社会の文化がどう英語圏の国々で受容されるか、また我々が外国文化をどう受け入れているのか、主にビジネス面から分析する。具体的には、学修者一人一人が設定したテーマに基づき、関連する資料の収集と自分で作成したデータを分析する。その上で、異文化受容の具体的な要件とは何なのか自分なりの考察を加えていく。						
〔演習内容〕 この演習では、青森市をはじめとした地域社会と日本における英米文化の受容と日本文化の外国における需要を、主にビジネス面から分析することを目的とする。本学の各科目で学んだ内容を土台にし、そこに自分で作成したデータに分析と論考を加えて、最終的に自分なりの結論を導く。一連の研究活動を通じて、グローバル社会における自分の立ち位置の確認を行うと共に、ビジネス面において、地域社会での異文化交流の在り方、一人一人の英語能力と異文化理解の向上が地域社会の発展にどう寄与するか考える契機とする。						
〔科目の到達目標〕 具体的な目標として、1) 先行研究の調査、2) データ作成、整理、分析 3) 論の立て方など論理的思考を人との対話を通じて育んでいく。過去には日本の人気マンガ・アニメ、ゲームの海外でのプロモーションや商機の比較、青森市の交通システムと新たな都市計画の発展、自分の家の献立から見える海外からの影響、などを自分自身が考えたテーマとして学生が一年間を通じて論じてくれた。						
〔ディプロマ・ポリシー (DP) との関係〕						
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 学部 学科 </div>						
DP1	DP2	DP3 ○	DP4 ○	DP1	DP2	DP3
〔前提条件〕 普段から英米の文化に関心を持っていること。自分が好きなものについて客観的な見方ができること。柔軟な思考と粘り強く人の話をよく聞き、説得する誠意を持つ意欲があること。						
〔学修の課題、評価の方法〕 (テスト、レポート等) 〔科目の到達目標〕で示した 1), 2), 3) 等の学修・研究活動を通じての成果物および演習授業内での発言や議論における貢献度、毎年度末に開催予定の ACB 演習プレゼンテーションを評価材料として点数化し、合算した総合点について以下の基準で評価を行う。プレゼンテーションや貢献度の評価は、内容や態度に加え、至らない点を認め、改善する姿勢を明示できるか、を評価する。 A: 80 点以上 B: 70 点以上 80 点未満 C: 60 点以上 70 点未満 D: 50 点以上 60 点未満 F: 50 点未満						
〔教科書等〕 教科書、参考書等は適宜、授業内で指示する。						

〔実務経歴〕	
該当なし。	
授業スケジュール	
時期	テーマと内容
第1週 から 第10週	(前期)授業内で学生各自が興味を持っていることを他のゼミ生と共有し、それがどのように海外で受け入れられているか、また今後受け入れられる可能性があるか議論する。学生が選択したテーマに基づき、教員が適宜、教科書や参考資料の該当箇所を指示する。
第11週 から 第20週	(中期)前期での議論や授業内容を元に、参考資料を学生各自が探し出し、それをを用いて簡単なプレゼンテーションを行う。他の学生は聴衆となり、そのプレゼンテーションの内容の論理構成に飛躍や矛盾等がないか活発な議論を通して確認し、互いのテーマへの理解を深める。夏季休暇中も自分のテーマに関連するニュースやイベントがあれば積極的に収集や参加を行う。常に自分のテーマに関連する情報を敏感にキャッチする習慣をつける。
第21週 から 第30週	(後期)教員からの指導、示唆を参考にして、自分自身の資料を準備し、発表主旨を固め、年度末プレゼンテーションの準備を進める。大切なことは、プレゼンテーションの巧拙よりも、テーマに対する熱意や調査を正確に行う意思、学問に対する真摯な態度を常に維持することである。学生も教員も自分が選択したテーマについて、どこまで理解を深め、どこがまだ至らないのかを互いに授業内で確認する。それを踏まえたうえで、プレゼンテーションに臨む。
試験	演習科目のため、定期試験は行わず、演習内での貢献度、進捗レポート、年度末プレゼンテーションの出来などを総合的に点数化し、成績をつける。